

花散里の歌

鈴木日出男

「花散里」巻は、物語の激動的な展開を遂げていく「賢木」「須磨」兩巻の間に、あたかも間奏曲のように組み込まれた短小の巻である。激変する情況のなか、きびしい苦境に立たされた光源氏が、ある夏の宵、往時をなつかしく思い起こしては心なごませるといふ、つかのまの感動を語っている。

五月雨の晴れ間、源氏が、亡き桐壺院の女御、麗景殿女御の邸を訪問することになる。源氏にとってこの女御は、亡き父院の思い出につながる心なつかしい存在であった。故院の時代から一変してしまつた現在の情況に生かされている源氏には、父院ゆかりの人々と往時をなつかしむことが、今現在を生きるための心の支えとなつてゐる。麗景殿女御もその一人であり、しかも彼は、院崩御後の彼女の生活をも支援している。このような源氏の桐壺院時代への回帰の心は、ひとり変らぬ誠実さとして物語を貫いている。

この女御と同じ邸に住んでいる妹の三の君は、かつて宮中で源氏と思いを交わした女君である。物語では次のように語られている。

御妹の三の君、内裏^{うち}わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざとももてなしたまはぬに、人の御心をもみ尽くしはてたまふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

(花散里・一五三頁)

源氏はこの女君に対しても、「例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず」という関係を保っていると語られている。「例の御心」とは、源氏に固有の性質、一たび契り交すとその関係を忘れずに待ち続けるといふ誠実な心癖を意味している。彼がその妹三の君を今も忘れずにいるというのは、院崩御後の女御への支援ともひびきあつていて、彼の誠実な心癖から出ているとみられる。とはいへ、源氏がこの女君に表立つた扱いをしないところから、女君の側からすれば物思いに心を砕くというのも当然である。

こうした源氏が女御の邸を訪れる途中の中川あたりで、かつて交渉をもつた女のもとに、従者の惟光に命じて、親しく関わつた昔日がなつかしいという歌を贈つた。しかし、相手の女はそらとほける

内容を詠むだけで、招き入れようとしてもしない。この話は、巻全体の傍流の、小さな挿入にすぎないが、源氏と女御姉妹の関係を知る上でぞわめて重要である。

源氏とその女が次のような贈答を詠んでいる。

源氏　をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根
に

女　ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨
の空

この場が「をりしもほととぎす、鳴きて渡る」とあるところから、二首はともに五月の「ほととぎす」をキーワードとする贈答歌になっている。歌言葉としての「ほととぎす」は一般的に、昔をしのぶごとを連想させるのであり、ここでもその機能を果たしている。源氏が、ほととぎすの自分は、過ぎし折の気分に戻ち返って、恋しさに堪えがたく鳴くのだ、かねて親しく語らったこの家の垣根で、と詠み贈ると、女が、ほととぎすの訪ね来る鳴き声は、昔の鳴き声そのものだが、五月雨の空模様ははっきりしないのと同じように、私にははっきりわからない、と応じた。源氏が「ほの語らひし」という過去を根拠にあらためて懸想するのに対して、女は「あなおほつかな」という不確かな記憶でしかないと切り返したことになる。懸想と切り返しが男女の贈答歌の常套的な表現方式ではあるが、この女の応じ方は、内心の記憶を封じこめながらも、あえて不確かだと空とほけてみせたことになる。惟光がそれを敏感に察知するところから、さらに源氏の思念にいたるまでの物語が次のよう語っている。

ことさらたどると見れば、惟光「よしよし、植ゑし垣根も」と出て出づるを、人知れぬ心にはねたうもあはれにも思ひけり。さもつつむべきことぞかし、ことわりにもあれば、さすがなり。

かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづ思し出づ。いかなるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほかやうに、見しあたり情過ぐしたまはぬにしも、なかなかあまたの人のもの思ひぐさなり。 (一五五頁)

惟光は、女の知らぬふりの言動から、無理な交渉と見てとつたのである。「花散りし庭の梢も茂りあひて植ゑし垣根もえこそ見わかぬ」(紫明抄)の歌を引用して、あたかも訪問先を見間違いたかのように見分けがなくなつたとして、その場から立ち去ろうとする。それに対して女は、「人知れぬ心にはねたうもあはれにも」思つた。内心、してやられたと恨みもし、いとしく心惹かれもするという複雑な感情に揺れ動くほかない。それと直感しないでもない惟光の心に即して、「さもつつむべきことぞかし、ことわりにもあれば、さすがなり」とある。女が慎ましく用心しなければならぬのには、それなりの道理があるはずだ、そうだとすれば女は新しい男を通わせているにちがいない、と想像するのである。この惟光の報告を受けた源氏も、女の心變りを了解した上で、この女とは対極的な存在として、筑紫の五節という女君を「らうたげなりしはや」と回想する。あたかも既出の人物のように語っているが、ここが初出である。ちなみに以後の物語には、小さな挿話として点描される程度ではあるが、「須磨」「明石」「落標」「少女」「幻」巻に登場し

ていて、ほとんど源氏の全生涯にわたってその交渉が持続している点に注意されるのである。そして源氏がここで彼女を「らうたげなりしはや」と執着されるのは、自分自身、「見しあたり情過ぐしたまはぬ」心癖、すなわち前記した「例の御心」の持ち主だからと語られている。長の年月が経ても、一度でも逢った女を忘れ去ることができない性分である。それが、「御心の暇なく苦しげなり」とみられるゆえんでもある。

そのことは、すでに巻頭に次のように叙述されている。これは単なる性格のありようというよりも、むしろ光源氏の本質というべきものである。

人知れぬ御心づからのもの思はしさは何時となきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへわづらはしう思し乱るることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。 (一五三頁)

源氏自身にそなわっている、多感でしかも誠実な心癖が、男女関係ゆえの「もの思はし」い憂愁さを招来させている。それが彼の日常にとりついているのだ。さらにここでは「かくおほかたの世につけてさへ」とあり、右大臣側との敵対関係から起こる社会的な情況までが加わり、いよいよ憂愁さが倍加しているという。そうであればあるほど、彼の心には変らぬ人間関係への欲求がつのつて当然である。しかし、源氏と関わる女の側からすれば、彼の誠心がかえって裏目に出て、多くの物思いの種にもなっているという。源氏が心の内には思いつげながら無沙汰を余儀なくされている、その彼の心

に応じ通すことができずに拒んだり、他の男との関係におのずと進み出てしまう者もいる。ここでの源氏には、そうした女たちのさまざまな心のありようが想像され、中川の女と筑紫の五節との対極的なまでの違いをかみしめている。女御の妹君については前記したように、自分が表立っては遇していないので心底物思いをかかえているはずの彼女を、捨てては置かれぬ存在だと思ふ。女御の邸を訪ねるゆえんでもある。

二

訪問先の麗景殿女御の邸のありさまが、次のように語りはじめられる。

かの本意の所は、思しやりつるものしく、人目なく静かにておはするありさまを見たまふもいとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き橘のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり。……昔のことかき連ね思されてうち泣きたまふ。 (一五五頁)

二十日の月が出る深夜、木々の影がいっそう暗く見えるだけに、かえって橘の花の花が香ぐわしく匂ってくる。いまは五月、橘が花を開かせる時節。花橘といえは、次のよく知られた歌を掲げるまでもなく、過ぎ去った往時を追憶させる歌言葉である。

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

(古今・夏 読人知らず)

確かに歌言葉としての「花橘」には懐旧を連想させる作用がある。しかしこの言葉の底意にはさらに常住不変という連想もこめられていよう。前代の万葉時代においては、むしろ「橘」は変らざる美質として讃えられる対象であった。平安時代におけるこの歌言葉は、その不変の觀念が懐旧へと移るところで成り立っているのである。いわば、時が経つても変らぬものだからこそ懐かしまれるという趣である。ここで源氏が橘の花の香を「なつかし」と思う感覺も、現在の女御の氣配が桐壺院在世の時代と少しも変わっていないと思ひ、それだけにその「昔のこと」があれこれと連想されてきて、懐旧の涙が禁じえないというのである。

右の叙述に直接して、源氏・女御が贈答歌を詠み交すことになる。ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、と思さるるほども艶なりかし。「いかに知りてか」など忍びやかにうち誦じたまふ。

とよ

源氏「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞいにしへの忘れがたき慰めにはなほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ紛るることも、数そふことはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語もかきくづすべき人少なうなりゆくを、ましていかにつれづれも紛れなく思さるらん」と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれに思いつづけたる御氣色の浅からぬも、人の御さまからにや、多くあ

はれぞ添ひにける。

女御 人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりければかりのたまへる、さはいへど人にはいとことなりけり、と思しくらべらる。

(一五六頁)

ここでは、「ほととぎす」の歌言葉の表現にも注意される。先刻中川の宿の垣根にとどまっていたらしいほととぎすが、源氏の後を慕つてこの邸に飛んできたというのである。その歌言葉としての「ほととぎす」は、前掲「花橘」と同様に、往時を懐しむことを連想させるのが一般的である。それは、源氏が「いかに知りてか」と吟ずる歌、

いにしへのこと語らへばほととぎすいかに知りてか古声のする

(古今六帖 第五)

によつても知られよう。確かに故院在世の過往を源氏が追懐している。しかしここではさらに、古来「ほととぎす」が死出の山のかなたからやつて来る鳥だ、と思われていた民俗の心とも結びついている。この「橘」がかつて常世の国から招来したといわれるのと同様に、これもまた異界と現世とをつなぎとめる景物である。人間の魂を永遠に伝えてくれる超越的な力が作用している。この場面の「橘」も「ほととぎす」も、懐旧と永続とを結びつけながら、物語の深層をつくり出しているとみられる。

源氏の詠む贈歌は、前掲の「五月待つ…」の歌を引いて懐旧の情を底流させるのみならず、次の歌をも引用している。

橘の花散る里のほととぎす片恋しつづ鳴く日しそ多き

これによって、「橘」を「花咲く里」ではなく「花散る里」とする点に注意されよう。もとよりこの旅人の歌は、亡妻追慕の歌である。「散る」の語じたいが、一種の終末感や衰退感をただよわせている。永遠への願いを言いつつも、現実のはかなさを直感せざるをえない。源氏の贈歌は、こうした歌々を引用しながら、自分を「ほととぎす」に擬えて、故院在世の過往を懐かしむ内容となっている。一首は、昔の人を思い起こさせる橘がなつかしいので、ほととぎすは橘の花の散るこの邸にやって来た、というのである。他方、女御の「人目なく…」の歌もまた、「ほととぎす」である源氏を、故院の昔の記憶に生きる人だとする。この一首は、訪ねる人としてなくすつかり荒れはてたこの住まいは、橘の花だけが軒端に咲いて、昔を懐しむ人(源氏)を誘うよすがとなった、の意である。二首は「橘」を院の盛時をなつかしく回想する点で共通しているが、この女御の歌では現在の衰退が強調されている。それだけ逆に、邸の橘の花は昔のままの源氏を誘い出せるよすがだと実感されてくるのである。

このような懐旧の情は、源氏の言葉「おほかたの世に従ふものなれば…」に述べられるように、右大臣専制の時代が桐壺聖代の遺風を顧みようとさせない、と嘆く気持ちに連なっている。時の権勢になびくのが世のならない、そのように俗権を掌握した右大臣方にひとり抗して生きる源氏は、まもなく無実の罪に陥れられようとしている。そうした源氏にとって、故院在世さながらを思わせるこの女御姉妹の周辺だけが、窮地に追いこまれた彼の心をなごませてくれるとい

うのである。「橘」や「ほととぎす」には、やはり常住不変への祈りがこめられている。

こうして源氏は、しのびよる危機に不安をいだきながら、その魂を束の間なりと安住の地のような「橘」の花散る里に置いたことになる。さらにいえば、意識の上では源氏に擬えられている「ほととぎす」には、故桐壺院の魂のイメージも重ねられているのではない。次巻「須磨」で、流離直前の源氏が故院の墓参りに赴いたあたりから跳梁しはじめる院の亡霊は、ついに須磨の地で暴風とともに現れて彼を救済することになる。源氏を中川の宿から慕い追う「ほととぎす」は、他界から彼を庇護しつづけようとする亡き父院の魂の象徴でもあるように思われる。次は、右の引用から続く巻末の叙述である。

西面には、わざとなく忍びやかにうちふるまひたまひてのぞき、
たまへるも、めづらしきに添へて、世に目馴れぬ御さまなれば、
つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の、なつかしく語らひた
まふも、思さぬことあらざるべし。仮にも見たまふかぎりは、
おし並べての際にはあらず、さまざまにつけて、言ふかひなし
と思さるるはなければにや、憎げなく、我も人も情をかはしつ
つ過ぐしたまふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかく
くに変るもことわりの世の性と思ひなしたまふ。ありつる垣根
も、さやうにてありさま変りにたるあたりなりけり。

(一五七頁)

「西面」は、妹の三の宮の居所。巻末にいつてようやく姿を現す彼

女は、いわば女御の影として描かれているが、この物語の内容にちなんで花散里と呼ばれ、源氏の重要な女君の一人として物語に組みこまれていく。源氏は、久方ぶりの訪問を受ける彼女を前に、女御に對したのと同じように、むしろそれ以上に人の心長さをおぼえる。長の途絶えが、かえって新鮮な感動をひき起こす。語り手は推測によつて、彼女の氣持を「つらさも忘れぬべし」、源氏の氣持を「思さぬことにあらざるべし」と語るだけで、読者の想像に委ねている。「我も人も情をかはしつづ過ぐ」というのだから、源氏にしても魂の原郷に還る思いである。それとは対極的な世の中の現実を、「とにかくに変わるもことわりの世の性」と思う。中川の女だけである、世の中すべての移ろいやすさに失望せざるをえないのである。

「花散里」巻はきわめて短小の物語ではあるが、苦境に立たされた源氏の心を一瞬なりと、彼をこよなくいつくしんでいた桐壺院在世の過往へと誘おうとする。「橘」や「ほととぎす」は、そのための重要な装置であった。何もかも激しく移り変わろうとする現実のなかで、それらの景物の言葉には、永遠なるものへの祈りが言いこめられているとみられる。

三

次巻「須磨」で、源氏は自主的に須磨の地に退去することを決意した。このまま京にとどまっては、政界から放逐されかねないと危ぶんで、一時期都から身を引こうと思ったからである。それなら一刻も早くと急がれるが、いざ離京となると、別れがたい人々がじつ

に多い。花散里もその一人として、次のように語られている。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれる御ありさまを、この御蔭に隠れてものしたまへば、思し嘆きたるさまもいとことわりなり。なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひたまひし所どころ、人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける。
(須磨・一六二頁)

ここでは、麗景殿女御の背後にいる存在ではなく、花散里という女君自身が物語の表に引き出されている。源氏は、彼女との交渉が稀ではあつても、その関係が持続するであろうことを前提に、自分の不在がどれほど彼女を心細くさせることだろうかと、気づかうほかない。後半では、これまでも語られてきた、源氏の心長さが繰り返されている。それだけに、彼女への誠実さが切実だとされる。

源氏の須磨行きについて、「三月二十日あまりのほどになむ」とある。ところが、物語叙述の進行としては、その離京の時点から数日前に遡つて、源氏がだいたいな人物たちとどのように別れを惜しんだかを詳細に語る。それは、一刻も早くにという切羽つまつた氣持からあらためて、夜陰に隠れるかのように多くの人々と別れを惜む物語が長大なものにふくれあがつたことである。源氏は花散里の邸をも訪ね、まずは女御を見舞つた上で、女君と逢つた。前巻の場面とは逆に、この花散里自身との交渉が、和歌贈答をも含みながら詳細に語られている。この源氏との贈答歌はもちろん、彼女は物語のなかではじめて歌を詠んだことになる。

西面は、かうしも渡りたまはずやとうち屈して思しけるに、あ

はれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるに、うちふるまひたまへるにほひ似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしめざり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。源氏「短なつかの夜のほどや。かばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ。事なしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先の例になるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と過ぎにし方のことどもたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あ

はれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、女 月影のやどれる袖はせばくともとめて見ばやあかぬ光

を

いみじと思いたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

源氏「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

(一七四頁)

日ごろ源氏との仲に物思う女君は、予想もしなかつた源氏の来訪を感動的に受けとめている。深夜の月に照らされる彼の姿がとりわけ印象的なもの、そのためである。この場面ではその深夜の「月影」がキーワードになっていて、贈答歌もその語を共有させている。夜明けも近く、その月が西山に沈んでいく。女君にはそれが、姿を消

していく源氏退去の映像映像のようにも見えてくる。しかも彼女は、再会の目途とてない、もしかするとこれが最期かもしれない、ぐらいに思うのであろう。彼の姿をじつと凝視していると、おのずと涙があふれるばかりだ。それを映像化した叙述が、「女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば」である。これは、次の、よく知られた伊勢の歌の引用によつていられる。

あひにあひて物思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる

(古今・恋五 伊勢)

一首は、ちょうどびつたりだ、物思うころ、涙に濡れた私の袖に映っている月までが、自分と同じく涙ゆえの濡れ顔なのだから、の意。涙に濡れた袖が鏡のようになり、それに夜空の月が映ると、その月までもが涙顔に見えてくる、というのである。これは、わが心の悲しみをもう一人の自分が凝視する発想からの、きわめて内省的な表現である。

花散里の歌もこの発想によつていられることが、「月影のやどれる袖」の語句からも知られるであろう。ここでの「月影」やそれに導かれる「光」は源氏の美しくも偉大な力をさす。また、その宿る「袖」が狭まいるというのは、自分の現況がいかに貧しくつたないことをいう。一首は、月影の宿っているこの袖がどんなに狭くても、いつまでもその光をとどめおいて、あなたに会ってほしいもの、ぐらいの意。前掲の伊勢の歌がそうであるように、つたないわが身を見つめながら、源氏との再会をつつましく願う。内省の心から出た表現である。

これに対する源氏の返歌は、再びめぐってきて結局は澄み輝くこととなる月影、それと同様にしばらくの間曇っている月のような私のことを、けつして愁わしげには思ってくれるな、の意。「行きめぐり」は、月の運行、源氏の流離と帰還の意を重ね、また「すむ」には、月が澄む、身の潔白が証される、帰って女君のもとに住む、の多義を重ねながら、結局は再会できるのだから思い屈してはならぬとしている。この返歌は、女君の自省を含んだ歌の力にあたかも促されたかのように、素直に再会を誓う表現になっている。その歌への添え書に「知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」とある。「行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり」（後撰・離別 源済）を引用して、重ねて思い屈するなど繰り返すのも、女歌への誠実な応じ方といつてよい。

そしてここでは、男女の贈答歌一般の方式とは逆に、異例の女の贈歌で開始するという点に注意される。しかし女からの積極的な贈歌とはいえず、ここでは相手の男の心をいわずに自方に引きつけようとする意図からだけ出ているのではない。いわんや相手への非難や挑発などではない。この女君の心に即してみるかぎり、源氏との関係を変えることなく保ちつづけたいと願いながらも、さしあたって別れねばならぬという現実。それをわが運命かと思ふほかないと訴えている。深夜の月の運行が彼女を触発していく。月は常に巡り動くもの、その光の恵みにいつも浴したい、源氏との仲もそうした常住不変の関係でありたいと祈る気持が、わが袖を鏡のようにまで涙で濡らしている。こうした心から詠み出された歌は、相手への反発的

な発想であるよりも、自分の存在を否定的にさえとらえようとする発想によっている。わが身を凝視する女歌の典型といつてよい。

源氏は須磨退去後も、都の多くの女君たちと、頻繁に歌を詠み交していく。これは、身を隔てながらも心をひびきあわせて京の地と流離の地を交信させるといふ、源氏の女性交渉の特殊なあり方として注意されるであろう。花散里との交流が次のように語られる。

花散里も、悲しと思しけるままに書き集たまへる御心ごころ
見たまふは、をかきも目馴れぬ心地して、いづれもうち見つ
つ慰たまへど、もの思ひのもよほしぐさなめり。

女 荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかか
る袖かな
(一九六頁)

「心ごころ」は女御も花散里も一緒という意であり、二人はともに遠距離の源氏と繰り返し積極的に詠み交したことになる。しかし「荒れまさる」の歌は、女御ではなく花散里自身からの贈歌とみるべきである。なぜなら、「しげくも露のかかる袖かな」の語句が、前掲惜別の場での女君の歌の「袖はせばくとも」と直接に連なっているからである。「袖」は、花散里の歌の重要なキーワードになっている。「しのぶ」は「忍草」「偲ぶ」、「ながめ」は「長雨」「眺め」の掛詞、また「露」は涙の意にもなる。一首は、いよいよ荒れはてていく軒の忍草を眺めて物思いをしながら、あなたを偲んでいると涙の露でしどに濡れる私の衣の袖だ、の意。自らの逆境に堪えながらも、相手を思いつづける心の変らぬ心の誠実さを証そうとする。これに対してどのような返歌を詠んだかは語られていないが、源氏

は花散里の邸の修繕を京の家司などに命じたという。女君の源氏への変わらぬ心づかいが、彼の心を揺り動かすのであろう。こうして二人の間には、遠距離を超えた信頼感が保たれている。

「明石」巻の終り近く、須磨退居から三年目の秋、源氏がようやく都に召還された。源氏がこの女君と再会するのは、やや月日が過ぎてからである。政務多端である上に、微行しづらい身分となったからとも、その理由が語られている。夏、五月雨の所在ないころ源氏の訪問があった。ここでも、女御から花散里へとめぐり逢うことになる。

女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸には夜更かして立ち寄りたまへり。月おほろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましかれど、端近ううちながめたまひけるさまながら、のどやかにてもものしたまふけはひいとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

女君 水鶏だにおどろかさずはいかにして荒れたる宿に月を
入れまし

といとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき世かな、かかるこそなかなか身も苦しけれ、と思す。

源氏「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月も
こそ入れ

うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思さざりけり。

(落標・二九七頁)

「水鶏のいと近う鳴」くところから、二人の贈答歌が導かれていく。歌言葉としての「水鶏」は、その鳴き声が戸を叩く音に聞こえるところから、男が女を訪ねるといふ発想の一種型になっている。ここでは、その水鶏が鳴く以外には誰も訪ねてくれない荒廢の住まいになっているとする。そして荒れはてた住居にも月光がさしこんだとして、源氏の来訪への感動をいう。「月」はここでも前掲の歌と同様に源氏をさす。一首は、せめて水鶏だけでも戸を叩いてくれないのなら、どうしてこの荒屋に月(あなた)を迎え入れることができよう、の意。荒廢の邸で源氏との再会をひとり待ちつづけることの孤独をさりげなく訴えてもいる。『弄花抄』が「この歌、最も優也。源の問ひ給ふを月にたとへたり。卑下の体、此家のふりたる心ばかり也」と評しているが、ここには女君のきびしい内省がひびきわたっている。源氏への感動とともに、わが身の現実を見つめている。これも女からの贈歌ではあるが、相手への反発などよりも、自己の反省を旨とする女歌の典型であるといつてよい。

これに対する源氏の返歌は、相手への懸想を旨とする男の贈歌とは異趣に、女君の言い分を切り返してみせた。「うはの空なる月」は、自分(源氏)以外の男。贈歌の「水鶏」を逆手にとつて、自分以外の浮気男が現れたのではないか、とあえて疑ってみせた。もちろんこれは、贈答歌としての言葉相互の機知によつたもの。こうした機知の表現が、贈答歌としての共感を生み出していく。源氏の側からいえば、女君の贈歌から、これまで訪ねてこなかつた自分があ

らためて顧みられるところから、こうした機知の言葉に転ずるほかないといふのである。後文に「なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず」とあるゆえんである。源氏はこうした贈答歌の手応えから、あらためて女君の重々しい存在に気づかせられたのであろう。

この贈答歌の後続に、次のようにある。

かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがな
と心にかけてたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。

(二九九頁)

「かの五節」は、「花散里」巻で、心変りした中川の女と対極的な存在として回想される筑紫の五節。ここでも、心変ることなく源氏とつながっていようとす、かけがえない女君として回想されている。花散里と同趣の女君として顧みられているのだから、花散里という人物がいかに心長く信頼に値する女君か、その資質を称賛していることになる。

四

後に花散里は源氏の二条東院に迎えられて、時折源氏の訪問を受けるが、共寝することはない。しかし彼女は、分をわかまえて心静かに暮らして、そうした心ばえに源氏は満足している（松風〈薄雲〉）。やがて源氏から元服した夕霧の後見を託され、親身に世話をしようになる。その若い夕霧の目から彼女がどのように見えたか、二人の関係が彼の目を通してとらえられている。

かくて年経たまひにけれど、殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ、何くれともてなし紛らはしたまふめるもむべなりけり、と思ふ心の中ぞ恥づかしかりける。

(少女・六七頁)

父源氏は花散里を、その器量や気性をよく承知の上で、「浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ」、何かと気づかっているが、それも結構なことではないか、と思う。「浜木綿ばかり……」は、次の歌によっている。

み熊野の浦の浜木綿もも百重もへなる心は思へどただに逢はぬかも

(拾遺・恋一 人麿)

幾重にも几帳や屏風などで隔てて対面するような関係だとして、夕霧はそれも夫婦の一つの形かと納得する。語り手はそれを「心の中ぞ恥づかしかりけり」として、大人顔負けの見方だと評している。こうした二人の仲は、確かに世間並々の親念を超えた親密な関係なのであろう。それは、歳月の経過を通してたがいにより自覚しえた変わらぬ信頼感にもとづいている。

やがて源氏の壮大な六条院が完成し、花散里は夏の町の住人として据えられた。「花散里」巻の物語が契機となつて、彼女は夏の町にふさわしい女君として重要な位置を占めるようになったのである。ここでは、夕霧のみならず、源氏の娘とされる玉鬘までが彼女によつて後見されるようになる。源氏の彼女への並々ならぬ信頼感が、そのような仕儀となる。

五月五日端午の節句、六条院の馬場で競射が催され、夏の町の住

人である彼女がそれを取りしきった。その夜、源氏と逢う一節である。ここでも彼女の方から歌を詠み贈り、源氏がそれに返歌をする。異例の贈答歌である。

女 その駒もすさめぬ草と名にたてる汀みづはのあやめ今日や引
きつる

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

源氏 にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひきわ
かるべき

あいだちなき御言どもなりや。源氏「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と戯れ言なれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れはてきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

(螢・二〇九頁)

花散里の贈歌は、端午の節句の競射にちなんで、「駒」と「あやめ」を詠みこんだ。「引き」は、駒を引く、あやめを引く、の両意。「あやめ」に自分を擬えるところにも、それが「駒もすさめぬ草」でもありとする。次の歌の引用による表現である。

大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし

(古今・雑上 読人知らず)

「駒もすさめぬ草」とは女体の衰えを自虐的に比喩した表現であり、

男に顧みられなくなつた女のありようを大胆に嘆いた歌である。ここの花散里は、自ら率先して歌を贈り、しかも右のような大胆な発想をとりこんだ。一首は、駒でさえ食わぬ草だと噂されるあの水際のあやめのような私を、今日は節句なので特に引き立ててくれたのかしら、の意。一個の女としての自分をさげすんでいるようにも、あるいは源氏を刺激しているようにもみえるが、それよりも、ここでも自己のありようを見つめた、内省的な歌になっている。そのような女歌ふうの表現の力に気づいたのであろう、源氏はこれに「あはれ」を感じざるをえない。

対する源氏の返歌の「にほどり」は雌雄そろつて水上を遊ぶかいつぶり、「若駒」が自分、「あやめ」が相手の女君。一首は、雌雄が一緒におどりのように、あなたと影を並べる若駒の私は、いつかあやめのあなたと別れることがあるか、あるはずもない、の意である。女の贈歌を切り返して、二人の関係の永続を強調している。源氏が冗談のように共寝を勧めるが、おつとりと構えている彼女は、今夜も「床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る」ことになる。とはいえ、二人は心隔てているのではなく、むしろ強い信頼によつて結ばれている。男と女の関係として、特別な親密さである。

以後、花散里という人物は、六条院を舞台にさまざまの人々と交流し、多くの場面に立ちあうことになる。しかしおおむねは、彼女自身がその人間関係の渦中に飲みこまれるよりも、むしろそれを傍観する立場に立たされている。たとえば、夕霧と落葉の宮の關係に

ついで、彼の後見役という立場から訓戒するということもある（夕霧巻）。

そのような立場を保ちながら、彼女は光源氏の物語の末尾まで登場しつづけていく。

紫の上の死を語る「御法」巻。紫の上主催の法会が果てたところで、紫の上の方から率先して花散里を相手に次のような贈答歌を詠み交す。紫の上の方から、妙に他人とは思えぬ親近感がつのつてきたからだというのである。

事はてて、おのがじし帰りたまひなんとするも、遠き別れめきて惜しまる。花散里の御方に、

紫の上 絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

御返り、

花散里 結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも
(御法・四九九頁)

「遠き別れ」と思う紫の上の贈歌は、これが私のこの世で嘗む最後の法会となるだろうが、この功德によって結ばれるあなたとの永遠の縁を頼もしく思う、の意。一面ではわが生命の終焉への不安が表されているとともに、もう一面では来世においてもこの御法ゆえに花散里とともに回生されるだろうと頼まれる、というのである。

自らの死への不安や絶望の一面を、相手の花散里とのかけがえのない共感の一面によってうちくらすとす。これに対する花散里の返歌は、残る生命の長からぬ私には、たとえ一通りの法会でさえ

も有難いことから、この盛大な法会によって結ばれる縁はけっして絶えることもあるまいとして、やさしみのこもる言葉で応じている。六条院のさまざまな人間関係を傍観しつづけた者ならではの、変らぬ誠実な心の歌である。

紫の上死後、茫然自失のままの源氏が翌年の夏を迎えたところで、花散里から歌を詠み贈り、源氏が返歌するという一節がある。

夏の御方より、御更衣の御装束奉りたまふとて、

花散里 夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみや
はせぬ

御返し、

源氏 羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき
(幻・五三七頁)

こども異例ともみられる女からの贈歌だが、源氏の更衣の衣裳を新調したのを贈るのに添えるための歌である。一首は、夏衣に着替える今日は、亡き人（紫の上）をしのぶ思いが特につのつていよう、の意。源氏の傷心をいくらかでも慰めてやりたい、その心づかいから詠み贈った歌である。対する源氏の返歌は、「夏衣」を「羽衣」と転ずるところから「うつせみ」を用いて、無常の思いを強調した。一首は、蝉の羽のような薄衣に着替える今日からは、その空蝉のはかない世の中がいっそう悲しい、というのである。返歌の、贈歌への切り返しが発想に立って、相手の同情はもちろん、故人への思惑までもつき抜けて、人生一般の無常をかみしめる歌となっている。しかし、そうした源氏固有の表現も、花散里のあいも変ら

ぬ誠心の歌に刺激されていることは、いうまでもない。

花散里という女君は、源氏にとつて、さまざまな情況にありながらも心変わらぬ人として信頼されつづけてきた。六条院の夏の町にその位置を占めて、夕霧や玉鬘を後援する役割を担うようになるのも、そのためである。その彼女が源氏を相手に異例の女からの贈歌を詠むというのも、だいたいな特徴であろう。しかしそれは、顧みない源氏に強く訴えたりというような抗議や挑発を意味しない。むしろそれとは逆に、相手との信頼感を保とうとする、いわば待つ女の類型に属するであろう。その証拠として、その贈歌には、自己を見つめる内省的な発想が言いこめられている。

物語中のこの女君について、従来、おとなしく穏順な人、あるいは家庭的な凡庸の人などと評しがちであった。確かに物語の状況状況でそのよう印象を与えることはあり、彼女の属性の一つ一つではあろう。しかし彼女の心の根本には世の常住を折りつづける女君として、光源氏の「心長さ」と照応しあっているとみられる。そこに、この二人の特殊な関係がつくり出されているのではないか、と思われる。

(すずき・ひでお 本学大学院非常勤講師)